

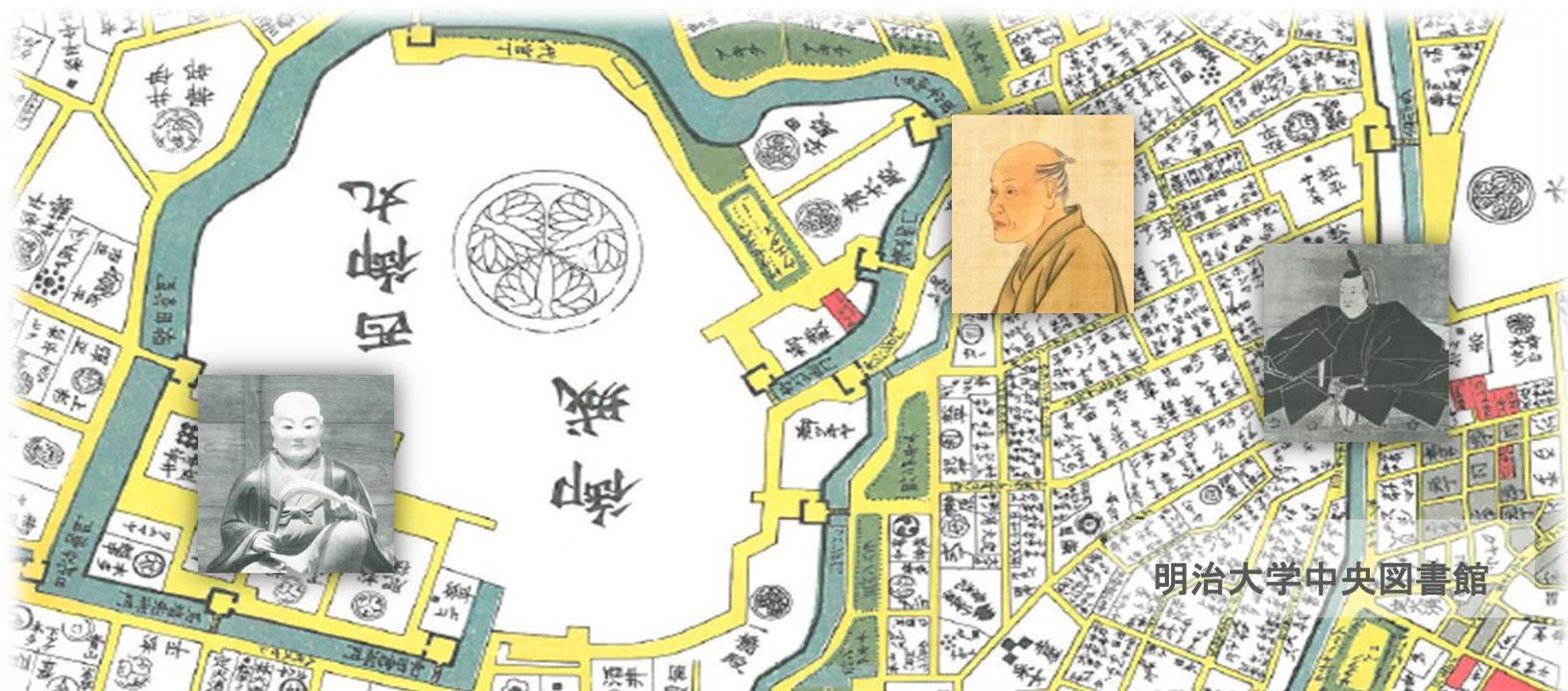
江戸の駿河台界限

—御茶ノ水ゆかりの人々—

2014年 10月4日(土)~11月1日(土)

[会場] 明治大学中央図書館ギャラリー

[休館日] 10/12(日)、10/26(日)、10/30(木)





ごあいさつ



江戸は、武士・町人あわせて百万人余りが住む、**世界有数の大都市**でした。

江戸城周辺は、江戸開府後四百年以上、政治経済、文化の中心となっています。

駿河台は、江戸城東北にあり一つの丘をなし、神田川をへだて本郷台へ続きます。

昔、ここは**神田山**とよばれ、江戸市中と富士山を眺望できる絶好の高台でした。

本学校歌に「白雲なびく駿河台 霊峰富士を仰ぎつつ」と謳われるとおりです。

さて、**江戸の中心に隣接する駿河台**は、どんな地域だったのでしょうか。

古来、ここにはさまざまな人士が往来し、歴史の一コマを彩ってきました。

私達も、そうした連綿たる歴史の流れの中に生きていると言えます。

そこで江戸から東京へ景観が変わる中で、**駿河台界限に生きた先人**を点描します。

今回の展示では、駿河台に縁のある人物を、肖像・写真、景観、プロフィール、関連資料・図書で紹介しました。

駿河台キャンパスの学生諸君はもとより、校友、教職員、大学関係者、近隣在住

の皆様、或いは偶然来校された方々にもご高覧いただき、**遙かなる時空を超えて**

駿河台界限の歴史と文化に想いを馳せていただければ幸いに存じます。

2014年10月



明治大学中央図書館

目 次

ごあいさつ	3
展示解説	
I 江戸草創期の人びと	5
1 平 将門(5) 2 太田 道灌(6) 3 大久保彦左衛門(7) 4 伊達 政宗(8)	
II 活躍した武将・文化教養人	9
5 徳川 秀忠(9) 6 小堀 遠州(10) 7 松尾 芭蕉(11) 8 徳川 綱吉(12)	
9 室 鳩巢(13) 10 大田 南畝(14) 11 中坊陽之助(15)	
III 幕末維新から昭和時代までの人びと	16
12 小栗 忠順(16) 13 河鍋 暁斎(17) 14 大主教ニコライ(18) 15 澤邊 琢磨(19)	
16 重野 安繹(20) 17 玉乃 世履(21) 18 小松宮彰仁親王(22) 19 亀井忠一・萬喜子(23)	
20 西園寺 公望(24) 21 岩崎 弥之助(25) 22 尾崎 行雄(26) 23 夏目 漱石(27)	
24 薩摩 治郎八(29)	
謝辞・参考文献	30

凡 例

本文ページは、下記のような段組みで記述されています。

- | | |
|----------------|------------|
| ① No. 人物プロフィール | ② ゆかりの地マップ |
| ③ 人物名
ふりがな | |
| ④ 生没年 | |
| ⑤ 解説文 | |
| ⑥ 肖像・写真、現状の景観 | |

展示企画・解説執筆・景観写真は伊能秀明、表紙・頁構成は廣田理恵が担当しました。

1 江戸っ子の守護神

たいらの まさかど
平 将門

? ~ 940



平安時代中期の武将。父は、桓武天皇のひ孫 ^{たかもちおう} 高望王の子 ^{たいらのよしもち} 平良持。下総国猿島・豊田地方（現在の茨城県西部）を地盤として勢力を張った。おじとの対立をきっかけにした一族の内紛は、関東全域での反乱（平将門の乱）に発展した。

将門は、坂東 8 か国を平定し、「新皇」と自称して王城を営み、朝廷をまねて文武百官を任命した。

朝廷は、将門反乱の報を受けて、追討軍をさし向け、いとこの平貞盛、^{しもつけ} 下野の豪族藤原秀郷の連合軍が、将門の軍勢を急襲した。将門は、飛来した一本の矢に当たり壮絶な最期をとげ、残党も討伐された。

『^{しょうもんき}将門記』によると、将門は^{きやうき}侠気（おとこぎ）に富み、^{こういん}皇胤（天皇家の血すじ）を自覚しつつ、武芸で立身しようとする「つわもの」（強者）だったという。

「新皇」将門は、関東一円を数か月支配したにすぎなかったが、中央から派遣された国司（地方官）を追放した。その行動は、関東の民衆に影響を与え、将門を東国の英雄として仰ぐ気風は、時代とともに強まっていった。

将門の首は、平安京へ送られ ^{みやこおおし} 都大路にさらされたが、白光を放って夜空に突然舞い上がり、江戸の ^{しばさき} 芝崎村（現在の大手町付近）に落下し、夜な夜な怪光を放ったという。

芝崎村には、古くから ^{ちんじゆ} 鎮守の社があり、ここに ^{くびづか} 首塚を築いて供養し ^{たた} 崇りを鎮めた。そして将門を武門の先駆けとして敬い、首塚をおろそかにしたら、怨霊に崇られると伝承された。現代でも周辺の企業では、首塚（都旧跡将門塚。28 頁の写真参照）に背を向けて座ると病気やケガをしたり、左遷されたりするという噂話を恐れて、オフィスでの机の配列を工夫しているという。ちなみに、ここは江戸前期の大老酒井忠清の上屋敷中庭で、寛文 11 年（1671）伊達家の ^{おいえそどう} 御家騒動の審理で呼び出された伊達安芸、原田甲斐の双方が突如として乱闘を始めて斬り殺された現場にあたる。近年、この首塚は、ミステリアスなパワースポットとして人気を集めている。

ところで鎮守の社は、江戸城の完成後、神田橋門内となった。慶長 8 年（1603）ころ江戸城と周辺の拡張工事に伴い、神田台（のちの駿河台）へ移され、さらに元和 2 年（1616）湯島の現在地に移された。この社は、平将門を祀った神田明神として江戸っ子の信仰を集め、江戸の ^{そうちんじゆ} 総鎮守ともよばれた。神田明神の祭礼「神田祭」は、日枝神社の ^{さんのおまつり} 「山王祭」とともに ^{てんかまつり} 天下祭とよばれ、豪華な行列が江戸城内に入り将軍の上覧に供されるほど盛んだった。



『神田明神史考』より



神田明神 隨身門

2 元祖江戸城と太田姫稲荷神社を創建

おおた どうかん
太田 道灌

1432～86



室町時代後期の武将。扇谷^{おうぎがやつ}上杉定正の重臣。扇谷上杉氏は、鎌倉公方^{かまくらくぼう}（足利将軍に代わり関東8か国、伊豆、甲斐の10か国を治めた足利氏一族）を補佐し、関東の政務にあたる関東管領上杉氏の一族だった。

道灌は、25歳ころ、現在の皇居内の旧江戸城本丸あたりに初めて江戸城を築いて、翌年の長禄元年（1457）に完成させ居城とした。この江戸城は、外城、中城、子城から成り、城の中心にあたる中城に静勝軒とよばれた居室などがあつた。

そのころは、今の日比谷から丸ノ内一帯に海水が湾入して漁民が住み、下記の和歌のように風光明媚な浜辺の景観が広がっていた。

「我庵^{わがいお}ハ 松原つづき 海近く ふじの高嶺^{たかね}を 軒端^{のきば}にぞみる」

江戸城は、江戸の湊や市場をおさえる役割をにない、道灌の築城以降、江戸は中世都市として発展していった。当時の城下は、平川河口を中心として房総、常陸^{ひたち}方面から物資を運ぶ船でにぎわったという。

道灌は、主君定正を守り、江戸城から出撃して三十余度の合戦にすべて勝利したという。他方で、幼少期から学問にはげみ、学問僧を招いて詩歌会を催す文化人としての一面も兼ね備え、名声が高かった。

ある日、道灌の姫が天然痘^{ほうそう}（疱瘡）にかかり、京都伏見の一口稲荷に祈願したところ、たちまちに回復した。道灌は、江戸城築城のとき、この霊験あらたかな神を分霊してもらい、のちに鬼門除けのために良^{きん}（北東）の方角に移して祀^{まつ}った。これが、太田姫稲荷神社のルーツとなった。

しかしながら、道灌は、扇谷と山内の両上杉家の対立が深まると、疑心暗鬼におちいった定正の手でその居館（神奈川県伊勢原市）で謀殺されてしまった。享年55。

その後、太田姫稲荷神社は、徳川氏による江戸城の増築にともない、神田台へ移された。

かつては神田川の南岸にあり、社殿は関東大震災で被災し、昭和3年（1928）に再建された。

昭和6年（1931）、現在のJR御茶ノ水駅1・2番線ホームの新設にともない、社殿は、そのまま現在地に引越した。ちなみに「道灌」の名は、皇居内の吹上御苑^{ふきあげぎょえん}と紅葉山^{もみじやま}の間にある道灌濠^{どうかんぼり}、明治大学紫紺館の北側を東西に通る駿河台道灌道に残されている。



『太田道灌』(太田道灌公事績顕彰会)より



太田姫稲荷神社

3 幕政に苦言を呈する「天下の御意見番」

おおくぼひこぎ えもん
大久保彦左衛門

1560～1639



江戸時代前期の旗本。16歳のとき徳川家康につかえ、秀忠、家光まで3代の将軍につかえた。

大久保氏一族は、徳川幕府草創期の功臣で、兄の忠世は小田原城主となった。忠世の子 忠隣は、2代将軍秀忠のもとで老中となり権勢をふるった。しかし忠隣は、推挙した大久保長安の不正事件に関連して、家康の不興をかった。ちなみに金山奉行となった長安は、検地や石見・佐渡・伊豆の金銀山開発に大いに手腕を発揮し、財力と権勢を誇った。しかし、その死後、生前の不正蓄財や陰謀のかどで、その子らは死罪に処され、忠隣も連坐し領地を没収（改易）されたのである。

忠隣の改易後、大久保氏は、しばらく不遇の時代が続いた。彦左衛門が、時勢に対して抱いた不満の一因は、ここにきざしたらしい。そして泰平無事の世相とうつろう人心にあきたらず、歴戦した古武士としての意地と誇りを通そうとする处世態度を貫いたと推測されている。

彦左衛門の人物像については、次のような逸話がある。兄の忠佐が後継ぎがないため、彦左衛門を養子にして駿河沼津城2万石を継がせようとしたところ、自分の働きで得たものでないからという理由で辞退したという。また大坂の陣に鎗奉行として従軍した。大坂城の落城後、夏の陣の際、家康本陣で旗の列が乱れたという風説が広まった。そのとき、現場にいた彦左衛門は、主家の恥が後世に伝わるのを慮り、風説を強く否定したという。

こうした気骨ある言動が、弱者に味方し将軍や大名にも苦言を呈する硬骨漢、すなわち「天下の御意見番」として講談化される素地となっていく。講談、舞台化されたストーリーでは、忠義一徹、頑固な老武士としての彦左衛門とともに、義侠心にあふれた江戸っ子で、腕に「一心白道」の刺青をした魚屋一心太助が登場することもよく知られている。

他方で、彦左衛門は、徳川氏の偉業を語る家訓的史書『三河物語』3巻を著した。上・中巻は徳川氏の仁政と先祖の功績、下巻は自分の体験を記している。徳川氏の興隆と武士の気質をうかがうに好史料といわれる。

ちなみに将軍秀忠のころ、登城のとき、旗本が駕籠に乗ることを禁止された。

彦左衛門は、大きな盥に縄をかけてかつがせ、これに乗って登城してみせた。旗本は老齢でも駕籠に乗れず、大名は腰抜けだから若年でも駕籠を許されるのかと逆ねじをくらわせたのである。ようやく秀忠の許しが出て、50歳以上の旗本は駕籠での登城を許されたという俗説にもとづいたのが、下記の川柳である。なお、彦左衛門の下屋敷地は、現在、港区白金台にある八芳園内にあったという。

「其頃の下乗の中に大盥」（柳多留 138-18）



『画報 近世史』より



杏雲堂病院 植え込み

4 独眼竜政宗と「仙台堀」のいわれ

だて まさむね
伊達 政宗

1567～1636



安土桃山～江戸時代前期の武将。出羽国（現在の山形県）米沢城で生まれ、幼名は、^{ぼんでんまる}梵天丸。
小田原城攻めに参陣して豊臣秀吉に臣従し、その死後、徳川家康に接近して関ヶ原の戦いでは徳川方に属して会津の^{うえずぎかげかつ}上杉景勝を攻めた。

大坂の陣でも徳川方について、仙台城主となる。一代で仙台藩 62 万石の基礎を確立した。優れた武将であるとともに、和歌や古典、茶道、能にも秀で、能書家でもあった。豪華さを好み、危機に遭遇したときに人の意表を突く行動も目立った。

幼少の頃、天然痘（疱瘡）で右目を失明し、長じて「^{どくがんりゅう}独眼竜」の異名をとった。しかし、死後に作る肖像には両目を描くよう遺言したという。

ある日、家康が政宗に江戸城総構え図（見取り図）を見せ、「もしそちらなら、どこから攻めるか。」とたずねた。政宗は、江戸城の東北にある「御茶ノ水」の台地（神田山、のちの駿河台）を指さし、「ここに大砲を備え付け、江戸城にむけて砲撃します」と応えたという。

2代将軍秀忠は、元和6年（1620）5月仙台藩に対して、本郷台と地続きの神田山を掘削して外堀とする大工事を命じた。万治3年（1660）2月、4代将軍家綱は、再び仙台藩に小石川の外堀の工事を命じた。

その結果、現在の水道橋から御茶ノ水にかけて、神田川両岸は絶壁がそそり立つような外堀となり、仙台藩が工事したことにちなんで「仙台堀」「^{ぼり}仙台濠」とよばれた。

政宗の墓は、仙台の瑞鳳寺瑞鳳殿にある。戦災で焼失した瑞鳳殿の再建工事のため、昭和49年（1974）に行った調査によると、身長は159.4 cmで同時代の大人の平均値を示し、顔は面長で鼻筋が通り、手足は骨太だった。

ちなみに政宗の波乱に富んだ生涯が、昭和62年（1987）にNHK大河ドラマ「独眼竜政宗」（山岡荘八原作）で放映された。あるシーンで、幼少の政宗が言った「^{ぼんでんまる}梵天丸もかくありたい」というセリフが、その一年を代表する流行語になった。このセリフは、恐ろしい^{ふんぬ}忿怒の形相をした^{ふどうみょうおう}不動明王が、じつは慈悲深い^{だいにちによらい}大日如来の化身であると知ったときの感動の一言だった。



東福寺霊源院HPより



お茶の水橋から見た神田川（御茶ノ水駅西側）

5 将軍家が愛飲した「御茶ノ水」

とくがわ ひでただ
徳川 秀忠

1579～1632



家康の3男。長兄信康が自害、次兄秀康が羽柴（豊臣）秀吉の養子になったため、江戸幕府2代将軍となった。妻は、豊臣秀吉の養女、じつは近江国の戦国大名浅井長政の三女於江（崇源院）で、秀吉の側室 淀君の末の妹にあたる。

慶長5年（1600）会津の上杉景勝攻撃に進軍中、下野国小山で石田三成の挙兵を聞き、東山道（中山道）を西進したが、進軍を妨げる真田昌幸の信濃国上田城を攻めて時間を空費し、関ヶ原の戦に間に合わなかった。

このため家康から叱責され、諸武将の調停でようやくゆるされた。

秀忠の長女千姫は、幼少の身で秀吉の遺児秀頼に嫁し大坂城に入った。秀忠は、大坂の陣では、家康とともに出陣し、ついに秀頼を自害させ、豊臣氏を滅ぼした。また娘和子（のちの東福門院）を後水尾天皇に嫁がせた。

そして朝廷の権限に属した高僧への紫衣着用の勅許を幕府が無効として紛糾し、これに反発した後水尾天皇が退位を決意する一因となった紫衣事件ののち、孫にあたる幼女（明正天皇）を即位させた。元和9年（1623）将軍職を家光にゆずり、江戸城西丸に隠居した。

ある日、秀忠が鷹狩りの帰りに、神田川北岸にあった高林寺という寺に立ち寄った。その時、寺の境内に湧き出た名水で茶をたてて喫したところ、ことのほか美味だった。それから、この名水が将軍家の茶の湯に用いられるようになり、「御茶ノ水」の地名が付けられた。こうして秀忠の時代から、JR御茶ノ水駅西口（お茶の水橋口）から交差点あたりの一帯は、「御茶ノ水」と通称されるようになった。

お茶の水橋が架かる神田川北岸は、いまでも切り立った崖となっている。かつては中国の名勝 赤壁にちなんで「小赤壁」とよばれた。その風光明媚な景観は、名所の一つとして江戸から明治の人々に愛された。また「茗溪」とも呼ばれた。ちなみに「茗」には、「お茶」の意味がある。JR御茶ノ水駅のお茶の水橋口から聖橋口までを結ぶ駅南の街路は、「茗溪通り」と呼ばれている。



『国史肖像集成』より



JR御茶ノ水駅西口前 交番脇

6 「将軍家茶湯指南」の綺麗さび

こぼり えんしゅう
小堀 遠州

1579～1647



江戸時代初期の大名、茶人。茶道遠州流の祖。

千利休^{せんりのききゅう}（1522～1591）、古田織部^{ふるたおりべ}（1543～1615）とともに、三大茶人とよばれる。

幼少時は、豊臣秀吉の弟、秀長に小姓としてつかえた。

その後、徳川家康、秀忠、家光の将軍3代につかえ、作事奉行（土木建設工事の責任者）をつとめ、名古屋城天守、伏見城本丸、大坂城本丸、仙洞御所、二条城二丸の工事を担当し、建築、造園に才能をあらわした。

慶長13年（1608）従五位下遠江守^{とおとうみのかみ}に叙任されたので、「遠州」とよばれた。

大坂の陣（1614～1615）では、中坊左近秀政^{なかのぼうさこんひでまさ}（江戸時代、中坊氏の屋敷はリパティタワーの敷地にあった）とともに大和国郡山を攻め、のちに伏見奉行を長くつとめた。

古田織部に茶の湯を学び、遠州好みの茶器を焼く七つの窯所^{えんしゅうしちよう}（遠州七窯）を指導し、新しい意匠の名物茶器を世に送り出した。

生涯に400回余りの茶会を開き、招かれた客は大名、公家、旗本、町人などあらゆる階層にわたり、延べ人数は2000人に及んだといわれる。また書画、和歌にも優れた。

遠州好みの茶風は、装飾性豊かで洗練された優美さをそなえたもので、「綺麗さび^{きれい}」といわれる幽玄で有心の茶道を創始した。

遠州は、将軍、大名、僧侶などに茶の湯を指南し、とくに寛永13年（1636）3代将軍家光^{きどう}に茶頭として奉仕したことから「将軍家茶湯指南^{しょうぐんけちやのゆしなん}」といわれた。

京都大徳寺の孤篷庵の茶室は、遠州の作として有名である。遠州の上屋敷は、いまの三井住友海上駿河台ビルあたりにあった。



頼久寺HPより



三井住友海上駿河台ビル付近

7 リバティタワー敷地にあった中坊屋敷の蔵に仮住い

まつお ばしょう
松尾 芭蕉

1644～1694



江戸時代前期の俳諧師。俳号は初め「宗房」、のちに「桃青」と名のつた。別号はさまざまあるが、「はせを」「芭蕉」と好んで署名した。伊賀国上野（現在の三重県伊賀市）に生まれ、伊賀上野藩の侍大将藤堂家に仕えた。俳諧の道を志して、古典学者・俳諧師の北村季吟に師事し「桃青」と号して再出発した。

ところで、リバティタワー敷地には、かつて4000石の旗本中坊氏の屋敷があった。その屋敷には、小さな蔵があった。初めて江戸に来た桃青は、中坊氏の家臣と親戚だった縁で、その蔵にしばし仮住いさせてもらった。若き日の桃青、のちの俳聖松尾芭蕉が、中坊屋敷の土蔵に身を寄せたことは、大田南畝著『一話一言』巻22に記されている。その蔵は、芭蕉がしばし草鞋を脱いだのにちなんで、のちに「芭蕉蔵」とよばれた。

磐城平藩（現在の福島県いわき市）の殿様で、文人大名として知られる内藤風虎（義概）は、季吟や連歌・俳諧師の西山宗因と親しく交わり、その門人にも虎ノ門にあった江戸上屋敷をサロンとして開放していた。桃青は、そのおかげで宗因と同席する機会に恵まれ、ようやく江戸の俳壇に登場することができた。

ちなみに内藤風虎の「六百番俳諧発句合」をはじめ膨大な「内藤家文書」は、本学の博物館で保管されている。だが桃青は、上方の俳壇で俳風をめぐる論争が泥沼化する中で、耽溺するイメージの世界と大衆迎合せざるを得ない俳諧宗匠としての生活のギャップに悩み、江戸市中を去り、隅田川対岸の深川村に庵を結んで隠遁した。当初、庭前に芭蕉の茂るままに芭蕉庵とよばれ、みずからも芭蕉翁と号した。

しかし、天和2年（1682）江戸の大火で庵は焼失し、翌年庵は再建されるが、虚構の世界のむなしさを悟った芭蕉は、以後「旅人」として生きる覚悟をした。生涯を幾たびもの旅に過ごし、『おくのほそ道』の旅に出て、旅の体験を通して「不易流行」の思想に目覚め、「日々旅にして旅を栖とす」という生き方を体得した。こうして、さび、かるみなどを理念とする蕉風俳諧を確立したのだった。

上方に蕉風を普及させるため、元禄7年（1694）5月最後の旅に出たが、健康すぐれず大坂で発病、御堂筋の旅宿で門弟たちに看取られつつ、10月息をひきとった。享年51、生涯独身。

遺体は、遺言によって近江の義仲寺（滋賀県大津市）に埋葬され、「芭蕉翁」の塚が築かれた。



『松尾芭蕉』(新潮古典文学アルバム 18) より

明治大学リバティタワー



8 儒学を奨励 湯島聖堂を創建した5代将軍

とくがわ つなよし
徳川 綱吉

1646～1709



江戸幕府第5代将軍。3代将軍家光の第4子。上野国館林25万石の藩主だったが、兄で4代将軍家綱に子がなく、次兄綱重も没していたため、5代将軍となった。

病弱な前将軍のもとで、江戸城大手馬札前^{げばふだ}に邸をもち、絶大な権勢をふるい「下馬将軍^{げばしやうぐん}」の異名をとった大老 酒井忠清を罷免して、幕政の実権を掌握した。治政不良の大名を改易や減封処分にし、また民政・財政を重視して年貢未進などの不正代官を大量処分して、幕府領の支配を刷新した。綱紀肅正の成果があがった天和・貞享期（1681～1688）の政治は、のちに「天和の治^{てんあ}」とたたえられた。

これに対して、元禄・宝永期（1688～1711）の政治は、側用人に牧野成貞や柳沢吉保^{ちやうよう}を寵用し、奢侈^{しやうし}にふけり悪政と評されている。

綱吉は、子の徳松（享年5）の死去後、子に恵まれなかった。神田橋外に護持院を開山した僧 隆光の勧めで、生類憐み令^{しょうるいあわれ}（発令年 1687～1709年）を発した。綱吉が成年生まれだったことから、とくに犬を大切にさせて、犬を傷つける者は厳罰に処された。ちなみに現在の中野キャンパスあたりに、広大な犬小屋を建てさせて野犬を収容し、その飼育費用は江戸市民の負担となった。生類憐み令は、世人の怨嗟^{えんさ}の的となって、綱吉は「犬公方^{いぬくぼう}」（公方は将軍の別名）と仇名^{あだな}された。もともと生類憐み令の意図は、儒教や仏教の慈悲の思想に基づき、動物の愛護を通した民心教化にあったが、元禄期以降は頻発され、人々を苦しめる天下の悪法となったのである。

ところで学問好きの綱吉は、儒教の教えを現実政治に反映させようとし、諸国に忠孝を奨励する高札^{ちやうこうさつ}を立てさせたり、幕臣を集めてみづから儒学を講義したりした。

元禄3年（1690）綱吉は、上野忍丘^{うえのしのぶがおか}から湯島昌平坂^{ゆしましやうへいざか}へ林羅山邸^{はやしらざん}の先聖殿（孔子廟）の移転を命じて、翌年竣工した。孔子を祀る大成殿には、綱吉自筆の扁額が掲げられ、積奠の日（2月11日）には綱吉みづから講義した。こののち、一般に「湯島聖堂」とよばれた。付属して建てられた講堂に昌平坂学問所が整備され、林家は大学頭^{だいがくのかみ}と称してこれを主宰した。

また護持院をはじめ、護国寺、東大寺大仏殿などの神社仏閣を建立し、幕府財政を悪化させた。綱吉の晩年には、元禄の江戸大火、大地震、宝永の富士山噴火、京都大火とたて続けに大災害に見舞われた。綱吉は、28年余り将軍に在職し、甥の綱豊を跡継ぎに定めて62歳で没し、上野寛永寺に葬られた。

湯島聖堂は、大正12年（1923）関東大震災で被災し、昭和10年（1935）鉄筋コンクリート造で再建され、現在に至っている。



『徳川綱吉』(吉川弘文館 人物叢書)より



湯島聖堂

9 幕府中興の英主 8代将軍吉宗のブレン

むろ きゅうそう
室 鳩巢

1658～1734



江戸時代中期の儒学者。万治元年（1658）江戸で生まれる。父は医者。通称は新助、号は鳩巢。

寛文12年（1672）2月加賀藩につかえ、秋には京都在住の朱子学者で教育家としても優れた木下順庵に学ぶよう命じられた。同じ門下に、6代将軍家宣の側近新井白石や対馬藩に仕えた朱子学者の雨森芳州らがいた。鳩巢は、加賀、京都、江戸を往来しつつ学問を深めた。

正徳元年（1711）54歳のとき、親友新井白石の推挙で幕府儒官に採用され、正徳3年駿河台に屋敷を与えられた。家宣、家継、吉宗の3代につかえ、侍講として吉宗の御前でたびたび講義し、吉宗による「享保の改革」のブレンの一人となった。

著書は、『赤穂義人録』『駿台雑話』など数多い。ちなみに元禄15年（1702）12月、元赤穂藩主浅野内匠頭長矩の恥をそそぐため、大石良雄以下の浪士47人が結束して、吉良上野介義央を討ちとった赤穂事件(赤穂浪士の吉良邸討ち入り)が起きた。

当時の世評は、仇討の行動を賞賛し、浪士たちを「義士」とよび助命を願った。鳩巢が著した『赤穂義人録』は、赤穂浪士を弁護する立場から書かれた代表的意見書である。『駿台雑話』は、鳩巢75歳のときの著で、仁義礼智信の5巻から成る。駿河台の草庵を訪ねた書生に、「翁」が雑談するスタイルで書かれ、話題は多岐にわたっている。享保19年（1734）8月没、享年77。文京区大塚の大塚先儒墓所に葬られた。

なお鳩巢は、現在、中央区銀座にある書画用品・香の老舗「鳩居堂」の命名者であるという。鳩居堂は、もと京都寺町の本能寺門前にある薬種商だった。屋号は、中国の『詩経』召南篇にある「維鵲有巢、維鳩居之」（維れ鵲に巢有り、維れ鳩之に居る）に由来する。巢作りのうまい鵲の巢に、巢作りの下手な鳩が入って棲みつく（いわゆる託卵の習性）のを、女性が夫に嫁いで家を我が家とすること、あるいは仮の住まいで暮らすことにたとえる。カササギの巢に託卵する鳩に「店は顧客のもの」という謙譲の意を込めたと解釈されている。



『日本名家肖像事典』より



明治大学アカデミーコモン(左側)
日本大学理工学部2号館(右側)

10 ほとばしるウィットとユーモア 江戸狂歌の天才

おおた なんぼ
大田 南畝

1749～1823



江戸時代中期の幕臣。戯作者、学者。通称は、直次郎。号は、^{よものあから}四方赤良、^{しよくさんじん}蜀山人など。

寛延2年(1749)に牛込仲御徒町(現在の新宿区仲町)で生まれる。父は、幕府の御徒(歩卒、下級武士)。年少から学問を志し、19歳のときたわむれに作った狂詩文を平賀源内にすすめられ、『^{ねぼけせんせいぶんしゅう}寝惚先生文集』と題して出版し、江戸の文芸界にデビューした。

明和年間(1764～1772)の末ころ、狂歌(皮肉や風刺をきかせた滑稽<パロディ>調の短歌)を始めると、天性の機智と諧謔の才能を発揮し、天明年間(1781～1789)になると爆発的に流行した。

しかし、天明末期に老中^{たぬまおきつぐ}田沼意次が失脚して、老中松平定信による寛政の改革が始まると、20年におよんだ文筆活動から足を洗って、昌平坂学問所に入門した。

そのわけは、寛政の改革を風刺した下記のような落首を作ったと疑われたことにあるらしい。

「世の中に かほどうるさきものはなし 文武といふて 夜も眠れず」

その後は、御徒の勤務のかたわら学問に励み、寛政6年(1794)46歳のとき学問吟味で首席となった。役人としても勘定所古記録取調べ、大坂銅座、長崎奉行所、玉川水防巡視などの職務を実直勤勉にこなし有能ぶりを示した。

寛政の改革の緊張感は、享和年間(1801～1804)からゆるみ、蜀山人という仮号で狂歌をよみ始めると、昔の名声が復活した。とくに『一話一言』は、江戸随筆の代表的作品として後世に残った。この作品は、安永8年(1779)頃から文政4年(1821)頃までの約40年間にわたり、南畝が記録した見聞雑著である。当時の世相や事件を目のあたりにした記述に富み、書名のとおり断片的な短文であるものの貴重な史料となっている。

けれども終生、御目見(将軍に拝謁できる身分)以上の地位に昇進できなかったのは、往年の戯作者としての名声が上役たちの心証を害して、出世に^{わざわい}禍したと伝えられる。

文化9年(1812)神田川を挟んで湯島聖堂と相対する駿河台の地に移り住み、文政6年(1823)没、享年75。太田道灌の和歌によせた狂歌に「山吹の はな紙ばかり 紙入れに 実のひとつだに 無きぞ悲しき」がある。辞世は、「生き過ぎて 七十五年食ひつぶし 限りしられぬ ^{あめつち}天地の恩」。



『近世名家肖像』より



Sola City

(JR御茶ノ水駅の東側 旧日立製作所)

11 リバティタワー敷地に屋敷があった4000石の旗本

なかのぼう ようのすけ
中坊 陽之助

1823～1873



江戸時代の駿河台一帯には、徳川家康の死後、駿府に在勤した「駿河衆」が呼びもどされ、屋敷を割りあてられた。この地域は、いわば將軍直参の旗本が住む武家屋敷街だった。

リバティタワー敷地のほとんどは、4000石の大身の旗本中坊氏の屋敷で占められていた。中坊氏は、延宝年間（1673～1680）以降、幕末まで代々この地に居住し、奈良奉行、駿府町奉行、日光奉行などの遠国奉行を輩出した名門である。宝永6年（1709）3月から正徳元年（1711）5月まで、長左衛門秀廣が、江戸の治安を守る特別警察の長官である火付盗賊改に任命された。また弘化元年（1844）8月から翌年3月まで、駿河守廣風が勘定奉行に在任した。

中坊氏は、江戸幕府の文教政策を司った林家とも、次のようななかかわりがあった。

大学頭林述斎には、九男九女があった。ちなみに述斎は、江戸幕府最大の系譜『寛政重修諸家譜』、徳川氏の正史『徳川実紀』などの編纂に功労があった。その次男が、南町奉行の鳥居甲斐守忠耀で、通称は耀蔵である。耀蔵は、老中水野忠邦を補佐して天保の改革を進め、世人から「妖怪」と呼ばれ恐れられた。妖怪のあだ名は、「耀甲斐」から起こったといわれる。

廣風のもとに、林述斎の五女絳が嫁いできた。廣風と絳夫妻の間には、文政6年（1823）に長男陽之助廣胖（寂定院）、ついで長女の阡が生まれた。のちに廣胖のもとに、鳥居忠耀の長女筈が嫁いできた。廣胖と筈は、いとこ同士だった。

廣胖は和歌に秀でた人で、父廣風の隠居で4000石の家督を相続したあと、昌平坂学問所世話心得頭取、中奥小姓、小納戸役をへて、41歳のとき番方役人（武官）として最高位の先手鉄砲頭に任ぜられた。明治6年（1873）1月死去、享年51。経歴をみる限り、廣胖は順調に出世し、ほぼ大過なく生涯を閉じたと思われる。

ちなみに中坊家の屋敷図は、石川武美記念図書館（旧お茶の水図書館）成賞堂文庫（歴史家徳富蘇峰旧蔵）で保管されている。また屋敷図カラーパネルが、アカデミーコモン地下1階の博物館ホールに展示されている。



明治大学博物館蔵「中坊家文書」より



明治大学リバティタワー

12 駿河台で生まれ 幕末の動乱に散ったラストサムライ

おぐり ただまさ
小栗 忠順

1827～1868



幕末・維新期の幕臣。文政10年（1827）駿河台に生まれた。新潟奉行小栗忠高の子。通称、又一。豊後守、のち上野介と名乗った。

安政6年（1859）9月、目付となり、遣米使節の一員に選ばれた。万延元年（1860）正月、日米修好通商条約批准書の交換のため渡米。遣米使節一行は、アメリカ船ポウハタン号で横浜を出港。太平洋を横断してサンフランシスコ着。パナマ地峡から大西洋へ出て、軍艦ローノック号に乗りかえ、ワシントンへ到着。帰路は、ニューヨークからアフリカ喜望峰、インド洋、香港を経て9か月をかけて帰国。日本人初の世界一周旅行を果たした。

ところで歴史教育では威臨丸の太平洋横断の方が有名だが、この船は使節団に随行した護衛艦で、艦長勝海舟や中浜万次郎、福沢諭吉ら90名が乗船したけれども、サンフランシスコまで往復したにすぎなかった。

忠順は、万延元年（1860）9月に帰国後、11月に外国奉行に就任。

これ以降、役職は、下記のようにめまぐるしく変わった。

文久元年（1861）7月 外国奉行罷免。

文久2年（1862）6月 勘定奉行。閏8月南町奉行へ転任。

12月 勘定奉行に再任、歩兵奉行兼任。

文久3年（1863）4月 上記の役職罷免。7月陸軍奉行並となるが、20日たらずで罷免。

元治元年（1864）8月 勘定奉行に復帰。

12月 軍艦奉行へ転任、本格的な造船施設である横須賀製鉄所の建設に専念。

慶応元年（1865）2月 軍艦奉行罷免。5月勘定奉行に再復帰。横須賀製鉄所開設。

慶応2年（1866）8月 海軍奉行兼任。

4回も勘定奉行に就いた忠順は、事実上の「蔵相」としてフランスとの緊密な関係のもと、窮迫した幕府財政の回復や洋式軍制の導入などに尽力した。

しかし明治元年（1868）正月、鳥羽・伏見の戦いに敗れ動揺して大坂城を脱出して江戸城にもどった前将軍徳川慶喜に徹底抗戦論を主張した。ために疎まれ、ついに全役職を罷免された。



『近代日本人の肖像』 国立国会図書館HPより



YWCA

忠順は、家族・家臣とともに領地の上野国群馬郡ごんだ権田村（今の高崎市郊外）に移住したが、東進した政府軍に捕えられ、明治元年（1868）閏4月6日、取調べもないままからすがわ烏川の河原で斬首された。享年42。

江戸開城後、小栗の屋敷は接收され、元土佐藩士の土方久元が住んだ。土方は、坂本龍馬や中岡慎太郎と連携して薩長同盟を仲介し、維新後は宮中で活躍し、宮内大臣等の要職を歴任した。のち伯爵。

ちなみに明治38年（1905）日露戦争の日本海海戦で、日本連合艦隊はバルチック艦隊を撃破した。のちに、東郷平八郎連合艦隊司令長官は、小栗の遺族に対して「上野介(忠順)殿が横須賀製鉄所を建設してくれたことが、この海戦での勝利に繋がった」と感謝の意を表したという。

なお、旧横須賀製鉄所にあったドックは、米軍横須賀基地内に現存している。また嘉永6年（1853）にペリーが来航して150年目の2003年から「よこすか開国祭」が毎年開催され、来年は横須賀開港150周年にあたる。

13 反骨と奇想 「画鬼」と呼ばれた天才絵師

かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎

1831～1889



幕末・明治時代前期の日本画家。天保2年（1831）下総国古河（現在の茨城県古河市）に生まれた。父は古河藩士、河鍋記右衛門。まもなく親子で江戸へ出て、父がじょうひけしどうしん定火消同心の株を買って甲斐姓を名乗って、御茶ノ水の定火消屋敷に住んだ。

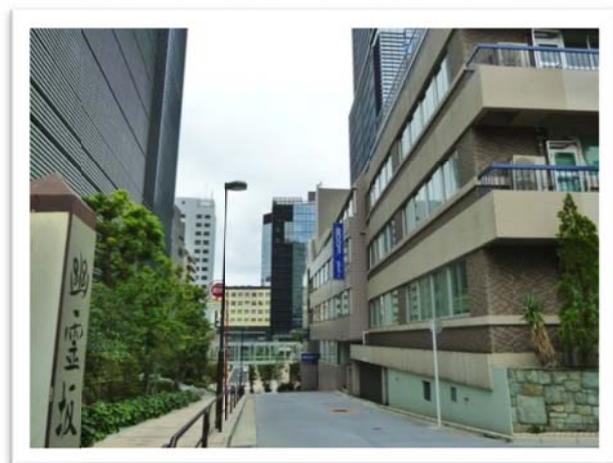
7歳のときから、浮世絵師の歌川国芳に浮世絵を学んだ。天保10年（1839）5月、梅雨で増水した神田川で生首を拾って写生し、周囲を驚かせたという。さらに狩野派の絵画技法を習得し、嘉永2年（1849）とういくのりゆき洞郁陳之の号を与えられた。

安政4年（1857）江戸琳派の絵師鈴木其一の娘を嫁に迎え、翌年独立して本郷で開業し、「きょうさい狂斎」と号した。明治3年（1870）10月、上野不忍池畔での書画会で、酔余の座興に新政府の役人を風刺する戯画を描いて、官憲の怒りにふれて4か月投獄され、出獄後、号を「きょうさい暁斎」と改めた。

明治14年（1881）第2回内国勸業博覧会に「枯木寒鴉図」を出品して、「妙技二等」を受賞し名声が広まった。鋭い写実力、機智に富んだ着想は抜群と賞讃された。暁斎のもとには、ニコライ堂の建設工事に関与した建築家ジョサイア・コンドルも弟子入りした。また、日本美術界の指導者岡倉天心、日本美術研究者フェノロサから、東京美術学校での教授を要請されたが、胃ガンにおかされ、明治22年（1889）4月26日死去、享年59。『暁斎画談』『暁斎漫画』など優れた作品を数多く残した。



『河鍋暁斎』（岩波文庫）より



ニコライ堂の東側・幽霊坂の南側

14 ロシア正教伝道と日露交流の架け橋

大主教ニコライ

1836～1912



日本ハリストス正教会の創設者。「ハリストス」とは、ギリシア語でキリストをいう。1836年8月ロシアのモレンスク県（現在のロシア西端、モスクワ西方約360km。西隣は、ベラルーシ共和国）で生まれた。ペテルブルグ神学大学を卒業。

文久元年（1861）箱館領事館付きのロシア正教会司祭として、キリスト教禁制下の日本へ到来した。迫害に臆することなく伝道に従事するとともに、日本の文化事情や日本語を学び、やがて元神官の澤邊琢磨をはじめ多くの信者を得た。箱館では、のちにキリスト教牧師、教育家となる新島襄と、日本語と英語を交換教授した。

一時帰国し、1870年ロシアで日本正教宣教師団を設立し、再び来日後、明治5年（1872）函館から東京駿河台へ移り、日本ハリストス正教会の組織・体制づくりを図り、澤邊らの協力で全国へ布教を進めた。明治13年（1880）には、教会数88、信徒5000人を数え、明治17年（1884）には、教会数219、信徒数は2万人に拡大した。

明治17年（1884）日本ハリストス正教会教団復活大聖堂（通称、ニコライ堂）の建設に着工し、明治24年（1891）竣工した。設計はロシア人建築家シチュルポフが担当し、構造設計・工事監理はジョサイア・コンドルが関与した。ちなみに現在のニコライ堂は、大正12年（1923）の関東大震災で鐘楼・ドームが被災し、昭和2～4年（1927～29）にかけて、岡田信一郎の設計で復興されたものである。異国情緒にあふれた建物と荘重に響く鐘の音は、神田名物の一つとなっている。

明治24年（1891）大津市で警察官がロシア皇太子を襲撃負傷させた大津事件では、露国皇太子側と日本政府側との間を仲介した。

明治37年（1904）日露戦争が勃発すると、ニコライは「露探」（ロシアのスパイ）と中傷されたが、信徒らに親書を送り、大聖堂にこもって日露両国の平和回復を祈った。

明治39（1906）年、大主教。明治45年（1912）2月没、75歳。台東区の谷中墓地に葬られた。

ニコライの深い信仰心と不屈の精神力、高邁な人柄と博愛は信徒のみならず数多くの日本人を感化し、宗教・文化両面で日露交流に大きな足跡を残した。



『ニコライ堂の人びと：日本近代史のなかのロシア正教会』より



ニコライ堂

15 坂本龍馬のいとこ 邦人初のロシア正教会信徒

さわべ たくま
澤邊 琢磨

1834～1913



明治時代、日本ハリストス正教会設立の中心的人物、司祭。

天保5年（1834）土佐国潮江村（現在の高知市）で生まれた。父は、土佐藩家臣の山本代七。

幼名は、数馬。坂本龍馬、武市半平太とは、いどこにあたる。

武市半平太の塾で学んだのち、江戸に出て鏡心明智流・桃井春蔵の道場「士学館」で剣術修業した。ちなみに桃井は、神道無念流・斎藤弥九郎の「練兵館」、北辰一刀流・千葉周作の「玄武館」とあわせて幕末三剣客といわれた。

道場の仲間と酩酊して通行人に乱暴を働き、逃げた古道具商が落とした懐中時計を売却した不良行為が官憲に知られた。心配した龍馬と半平太の手助けで江戸から脱出し、仙台を経て箱館へ渡った。

文久元年（1861）箱館神明社宮司の澤邊幸司の女婿となり、澤邊姓と神職をついだ。

箱館在住中に、のちに同志社（現在の同志社大学）を創立する新島襄のアメリカ密航を手助けしたことがあるという。ちなみに新島は、現在、千代田区神田錦町3丁目にある学士会館の敷地内（当時、安中藩邸内）で天保14年（1843）に生まれた。

琢磨は、キリシタン邪宗門の先入観から、箱館領事館付きのロシア正教会司祭ニコライの殺害を決意し、詰問に行ったところ、反問されてキリスト教を学び始めた。

明治元年（1868）他の2名とともにニコライから洗礼を受けて、日本ハリストス正教会最初の信徒となった。教名、パウエル。

けれどもキリスト教信仰は、明治6年（1873）のキリシタン禁教政策の撤回まで禁止されていたため、澤邊も迫害され、明治5年（1872）仙台で3か月余り投獄された。

明治7年（1874）以降、東京から全国を巡回して布教に努めた。

大正2年（1913）6月没、享年80。



『近代日本人の肖像』 国立国会図書館HPより



ニコライ堂

16 我が国最初の文学博士 異名は「抹殺博士」

しげの やすつぐ
重野 安繹

1827～1910



江戸末期・明治初期の漢学者、指導者的な歴史学者。

文政10年（1827）薩摩国鹿児島郡（現在の鹿児島市）に生まれた。父は、郷士で薩摩藩の御能方。藩校造士館に入り、嘉永元年（1848）江戸に出て昌平坂学問所で学んだ。

帰国後、同僚の金の使い込みに連坐して奄美大島へ願遠島ねがいえんとうになったとき、のちに明治維新最大の指導者となる西郷隆盛（1827～1877）と出会った。

帰藩後、薩英戦争の戦後処理に辣腕をふるった。元治元年（1864）造士館助教。

明治4年（1871）9月上京、12月文部省（当時は湯島聖堂の昌平坂学問所跡に置かれていた）へ出仕。以後、修史事業に関わった。明治12年（1879）東京学士会院会員に当選。

明治15年（1882）『大日本編年史』の編纂に参画して、軍記物語『太平記』の史的な検討の結果、それまで南朝側の忠臣とされた児島高德まつきつはかせの存在を否定したため、「抹殺博士」の異名をとった。けれども、これが史料による近代的考証史学のきっかけとなったとされている。

明治21年（1888）加藤弘之こなかわらきよりのり、小中村清矩らとともに、日本で最初の文学博士の学位を授与された。また元老院議官、帝国大学文科大学教授。

明治22年（1889）「史学会」初代会長。明治23年（1890）貴族院勅選議員。

門人で、三菱財閥2代目社長の岩崎弥之助のため、静嘉堂文庫せいかにどうぶんこの創設に寄与した。

最晩年に、勅命によって、「明治維新の三傑」大久保利通を顕彰する「大久保公神道碑」（明治43年9月建立）の撰文をおこなった。この碑は、港区南青山の青山霊園に現存する。

明治43年（1910）12月、駿河台の自邸で死去。邸宅は、現在の明治大学百周年記念大学会館の位置にあった。

著書に『赤穂義士実話』、『稿本国史眼』こうほんこくしがん（星野恒、久米邦武共著）、『重野博士史学論文集』上中下等がある。



『近代日本人の肖像』国立国会図書館HPより



明治大学百周年記念大学会館

17 明治時代の「大岡越前」

たまの よふみ
玉乃 世履

1825～1886



明治時代前期の司法官。文政8年(1825)周防国岩国藩(現在の山口県岩国市)藩士、桂脩助の子として生まれた。のちに藩の学者玉乃九華のあとを継ぎ、玉乃姓を名乗った。

20歳代後半に京都に游学し、頼三樹三郎、梅田雲浜、僧月性らの攘夷論者と交遊した。帰藩して藩校教授となって子弟の教育にあたり、また兵備の充実に尽力した。幕府の長州征討に、農兵隊を率いて幕府軍と戦った。

明治2年(1869)長州閥の実力者^{ひろさわねおみ}広沢真臣に認められて明治政府に登用され、さまざまな裁判事務を担当した。司法卿江藤新平のもとで進められた法典編纂作業にも参画した。

明治8年(1875)5月創設直後の大審院(旧司法制度での最高、最終裁判所)の院長代理に任ぜられ(50歳)、明治11年(1878)9月初代大審院長に任命されたが、翌年10月^{しほうたゆう}司法大輔(司法次官)に転任し、治罪法(刑事訴訟法)、民法の編纂に関与した。

明治14年(1881)7月再び大審院長に任命されたが、明治19年(1886)8月8日夜、駿河台の自宅で急死した。享年62。数日後、死因は、太刀による自死だったことを各新聞がいっせいに報じて、世間を驚かせた。

玉乃は、明治初期に司法官として頭角を現し、参議^{おおおかえちぜんのかみ}広沢真臣暗殺事件裁判(明治5～8年)、鹿児島県令大山綱良ら西南の役関係者の裁判(同10年)、参議大久保利通暗殺事件裁判(同11年)、自由党福島事件裁判(同16年)、自由党高田事件裁判(同16年)など、数々の重大事件の裁判に関与した。

薩長出身でない玉乃が、司法官最高の重職に就き、しかもそのポストを10年近くも務めたのは、当時の法曹界でもっともすぐれた人材だったからであろう。当時の世論は、有名な江戸町奉行^{おおおかえちぜんのかみ}大岡越前守の名声にたとえて、玉乃を「明治の大岡越前」と称賛した。

ちなみに「大正の大岡越前」と称えられるのは、14代大審院長^{よこたひでお}横田秀雄である。横田は、明治、法政、早稲田、慶応義塾等の大学で民法を講義し、大正13年(1924)11月明治大学長(昭和8・1933年当時は明治大学総長)に就任した人である。



『国史大辞典』より



日本大学法科大学院(日本大学お茶の水キャンパス)
～コトブキシーティング(株)・書店会館の間

18 駿河台キャンパスに宮殿があった皇族

こまつのみやあきひと
小松宮彰仁親王

1846～1903



明治時代の皇族、軍人。

伏見宮邦家親王の第8子。幼名は、^{ながみや}豊宮。

安政5年(1858)3月親王となり、嘉彰の名をたまわる。慶応3年(1867)12月、王政復古の重大令により設けられた^{ぎじょう}議定に任ぜられ、京都御所の^{こごしよ}小御所で開かれた御前会議に出席し、徳川氏の^{じかんのうち}辞官納地の処分について論議に参加した。

明治元年(1868)正月、軍事総裁、ついで外国事務総裁、海陸軍務総督、兵部卿、会津征討総督を歴任。

明治3年(1870)閏10月から5年10月まで英国留学。

明治7年(1874)陸軍少将となり、前参議江藤新平ら不平士族による佐賀の乱、西郷隆盛を中心とした鹿児島士族による反政府暴動である西南戦争の鎮圧に功績があり、明治13年(1880)陸軍中將に昇進した。

明治15年(1882)小松宮と称し、彰仁と名を改めた。

明治16年(1883)ころ、駿河台キャンパスの全域は、小松宮の広大な御用邸に一変した。現在のアカデミーコモン辺りに洋風2階建ての宮殿、リバティタワー辺りに厩舎(馬小屋)と馬場があった。

明治23年(1890)陸軍大将となり、日清戦争で征清大総督に任命された。

明治35年(1902)明治天皇の名代として、英国国王の戴冠式に参列した。このほか日本赤十字社、大日本農会など多くの団体に総裁を務めた。

明治36年(1903)2月病死、享年58。国葬が営まれた。

彰仁親王の病没後、宮家は一代で廃絶され、侯爵小松家が祭祀を継承した。

ちなみに彰仁親王の弟宮で、寛永寺貫主の公現親王(^{こうげん}のち還俗して北白川宮能久親王^{きたしろかわのみやよしひさ})。陸軍軍人、独逸学協会初代総裁)が住んだ上野公園内には、小松宮の騎馬像が建てられている。

なお、本学の母体となった明治法律学校が現在地へ移転したのは、明治44年(1911)10月のことだった。



『Net Pinus』61号(雄松堂HP)より



明治大学アカデミーコモン(右)・リバティタワー(左奥)

19 駿河台キャンパスに実家があった三省堂創業者夫妻

かめいただかず まきこ
亀井忠一・萬喜子

1856～1936 1855～1927



大学会館の脇に急坂がある。江戸時代は胸突坂むなつきざかと呼ばれ、現在は、明治大学総長の名前にちなんで吉郎坂きちろうざかと呼ばれている。

慶応元年（1865）頃、その急坂南側に沿って、ひな壇状に三軒の侍屋敷が建てられていた。坂の下から上へ順に、亀井与一郎（知行 500 石）、大久保嘉左衛門（禄高 300 俵）、溝口五左衛門（同 300 俵）の屋敷だった。

亀井氏の屋敷は、現在駿河台下にある大手書店三省堂書店の創業者亀井忠一の夫人萬喜子の生誕地、すなわちかつての実家の所在地にあたる。萬喜子は、納戸役をつとめた亀井與十郎の二女として、安政 2 年（1855）3 月ここで生まれた。のちに、旗本中川市助に懇望して、五男の忠一が婿入りして亀井家を継いだ。

もともと忠一・萬喜子夫妻は、最後の将軍徳川慶喜が静岡へ隠退するのに随って沼津へ行き、慣れない畑仕事などして暮らしていた。

しかし明治 6 年（1873）に上京し、麴町で下駄屋を開業した。下駄の販売が軌道に乗り始めた明治 14 年（1881）2 月、四谷筆筈町たんすの大火事で類焼したため、4 月に裏神保町 1 番地（現在の三省堂書店所在地）で、わずか 18 坪の古本屋「三省堂」を創業した。奇しくも三省堂の社史は、明治法律学校の歴史と同じ年から始まった。

見よう見まねで古本を仕入れてみたものの、値段の付け方がよく判らず、東京大学の先生や学生に値決めしてもらってようやく開店した。そこで、三省堂は、買値が高くて売値が安いと評判になったという。

当初は洋書の取り扱いが多く、萬喜子が近所のドイツ語教師のもとへ閉店後に通い語学勉強したという。

英語も、当時駿河台にあった静修女学校で英語を教える城山帰一夫妻のもとへ、赤子を背負い夜 11 時過ぎに通って学んだという。

萬喜子は、いわゆる良妻賢母型の女性で、使用人の面倒見も良かったと伝えられている。

ちなみに社名「三省堂」のいわれは、『論語』学而篇にある「吾日三省吾身」（われ、日にわが身を三省す）に由来し、「日に幾度となくわが身を省みる」ことを意味している。



亀井忠一



萬喜子



明治大学リパティタワー 北ウイング

『三省堂書店百年史』より

20 明治法律学校創立に関与 最後の元老

さいおんじきんもち
西園寺公望

1849～1940



明治～昭和前期の政治家。最後の元老。嘉永2年(1849)公家の名門右大臣徳大寺公純きんいとの次男として生まれた。兄の徳大寺実則とくだいじきねのりは明治天皇の侍従長、弟の住友友純すみともともいとは住友銀行の創設者となった。

嘉永5年(1852)西園寺家の養子となった。少年期から進取の気質の持ち主として知られた。慶応3年(1867)12月王政復古後、まもなく新政府の参与に任官。明治元年(1868)正月から翌年5月まで薩長中心の討幕派と旧幕府軍が戦った戊辰戦争に従軍。

明治3年(1870)12月、フランス留学を命じられ、アメリカ、イギリス経由で渡仏。1875年11月から1879年までパリ大学に学び、自由主義思想にふれた。留学中、のちに評論家・政治家として活躍する中江兆民と相識り、明治法律学校創立者の一人となる岸本辰雄とは同じ下宿で暮らした。

明治13年(1880)10月に帰国後、「明治法律学校設立ノ趣旨」の起草に関与し、翌14年1月に開校当初は、フランス行政法の講義を担当した。

明治15年(1882)3月伊藤博文に随行して渡欧。憲法調査にあたり翌年8月帰国。明治17年(1884)7月華族令の制定で侯爵を授けられた。明治23年(1890)帝国議会開設にあたり貴族院議員となり、明治27年(1894)10月第二次伊藤博文内閣に文部大臣として入閣。

明治33年(1900)8～9月、伊藤を補佐して立憲政友会の創立に参画した。10月枢密院議長に就任。

明治36年(1903)7月枢密院議長を辞任し、第2次立憲政友会総裁に就任。

日露戦争中から戦後にかけて、軍人政治家の桂太郎と交代で政権を担当して、いわゆる「桂園時代」を築いた。明治39年(1906)1月組閣の大命を受け、第12代内閣総理大臣となり、第一次西園寺内閣が成立した。しかし日露戦争後の財政難や社会主義運動の取締り不十分が、元老山県有朋の不評を買い、41年(1908)7月総辞職に追い込まれた。

明治44年(1911)8月第14代首相となり、第二次西園寺内閣を組織したが、大正2年度の予算案作成で陸軍が要求した二個師団増設案を否決したため、陸軍と対立して、翌大正元年12月退陣した。

2度の首相退陣後は、元老として政治的影響力を保った。

大正7年(1918)9月三たび組閣の大命を受けたが組閣を辞退し、立憲政友会総裁で爵位を持たない原敬はらたかしを推薦して、「平民宰相」と初の本格的政党内閣の誕生に一役買った。大正8年(1919)1月パリ講和会議に全権



委員として渡仏し、ベルサイユ条約に調印し、翌年9月その功績により公爵を授けられた。

その後、山県有朋、松方正義の死で唯一の元老となり政界に重きをなして、イギリス流の立憲君主主義と自由主義的議会政治を理想として、政党指導者を首相に推薦することで、大正末期から昭和初期にかけて政党政治の定着に貢献した。しかし、昭和7年(1932)5月、五・一五事件で犬養毅首相が襲撃され、軍部の台頭により西園寺の政治的影響力は後退し、昭和11年(1936)2月、二・二六事件が勃発すると、後継首相の人選を最後にその発言力はほとんど失われた。昭和15年(1940)11月24日死去、享年92。日比谷公園で国葬が行われた。

ちなみに駿河台の西園寺邸には、のちに散文詩的な短編『武蔵野』で文壇デビューする国木田独歩が居候していた。また明治40年(1907)6月西園寺が、当時一流の文士を招き一夕歓談の場を設けようと、会合(のちに「雨声会」といわれた。)を開いたが、夏目漱石などが出席を辞退した。西園寺邸周辺には、旅館が多くあった。これらは、地方から西園寺への陳情で上京した、いわゆる「西園寺詣で」の人びとの常宿となっていた。のちに中央大学が西園寺邸と隣の戸田伯爵邸を譲り受けて、キャンパス用地に使用した時期があった。

2.1 三菱財閥2代目社長

いわさきやのすけ
岩崎弥之助

1851~1908



明治時代の実業家。嘉永4年(1851)土佐国(現在の高知県)に地下浪人(在村浪人)岩崎弥次郎の次男として生まれた。のちの三菱財閥(現在の三菱グループの前身)の創業者 弥太郎の弟。

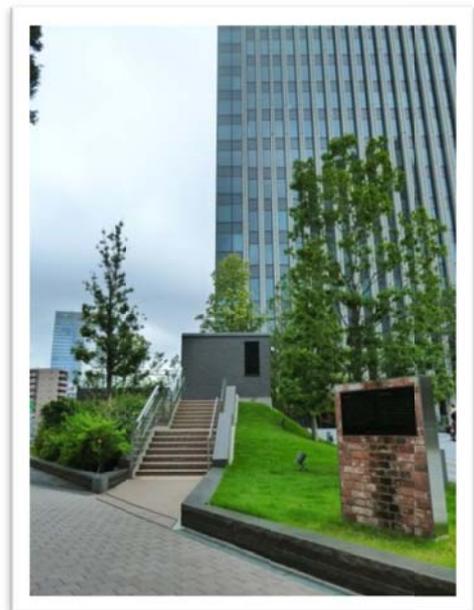
明治4年(1871)大阪に出て、儒者重野安繹の塾に入門。明治5年兄弥太郎の勧めでニューヨークに留学、翌年帰国。その後は、弥太郎を助けて創業期の三菱会社の経営にかかわり、明治18年(1885)2月弥太郎の死去により郵便汽船三菱会社社長に就任。同年9月競合する共同運輸会社と合併して日本郵船会社(現在の日本郵船の前身)を設立し、三菱は海運業から撤退した。

明治19年(1886)3月新たに「三菱社」を創立して鉱業・造船・銀行・地所・倉庫などの事業に転進した。

明治23年(1890)帝国議会の開設にあたり、貴族院議員に勅選された。また丸ノ内に雑草の生い茂る10万坪の土地を買収した。4年後に最初のオフィスビルとして三菱一号館が竣工した。これを皮切りに、ロンドンの



雑誌『太陽(The Sun)』第2巻第24号、口絵より



Sola City

(JR御茶ノ水駅の東側 旧日立製作所)

ロンバード街にならった赤煉瓦街が建設され、一丁倫敦といわれるようになった。こうして現在のオフィス街のもとになる洋式事務所街の建設が進められたのである。

明治 26 年（1893）12 月三菱合資会社を設立し、社長の座を兄弥太郎の長男久弥に譲った。

明治 29 年（1896）6 月男爵を授けられた。ちなみに弥之助は、維新の元勳後藤象二郎の長女早苗と結婚した。そして後藤が所有した駿河台の土地を譲り受けて、ここに自宅と三菱社を建てた。岩崎男爵邸と呼ばれた洋館は、淡路坂の途中にあった。現在では、岩崎邸擁壁の赤レンガを保存・再利用したモニュメントが、旧日立製作所跡に建てられた Sola City の公開空地に残るのみである。

弥之助は学問を好み、古美術品や書籍を収集した。そして恩師重野安禱の修史事業を支援して『国史綜覧稿』10 冊その他の歴史書を刊行した。また清国の蔵書家、金石学者陸心源の蔵書 4 万冊余を購入して静嘉堂文庫を創設した。明治 29 年（1896）11 月松方正義首相の要請により、第 4 代日本銀行総裁に就任した。明治 41 年（1908）3 月死去、享年 58。

ちなみに弥之助の長男小弥太は、大正 5 年（1916）7 月三菱合資会社社長に就任し、社有事業の分系会社化を進め巨大なピラミッド型企業組織を形成した。また成蹊学園の創立、静嘉堂文庫の公開など教育・文化事業にも尽力した。小弥太も、大正 12 年（1923）9 月の関東大震災まで岩崎男爵邸に住んでいた。

2 2 「憲政の神様」

おざきゆきお
尾崎行雄

1858～1954



明治から昭和前期の政党政治家。号は峯堂。ちなみに、峯峯は直言することである。安政 5 年（1858）地方官尾崎行正の長男として現在の神奈川県津久井町に生れ、父の転勤で渡会県山田（現在の三重県伊勢市）に住んだ。

明治 7 年（1874）慶応義塾入学（のち中退）。明治 12 年（1879）福沢諭吉の推薦で「新潟新聞」主筆となった。

明治 14 年（1881）参議大隈重信の側近矢野文雄（竜溪）に招かれ統計院に入職したが、「明治十四年の政変」で失脚した大隈重信に随って下野し、立憲改進黨の結成に参画した。

明治 18 年（1885）東京府会議員となり、「朝野新聞」で健筆をふるった。

明治 20 年（1887）12 月保安条例違反で東京から追放され、駿河台を去って欧米に遊学した。

明治 22 年（1889）不平等条約の改正交渉にあたった外相大隈が襲撃され負傷したとの報を受けて帰国。

明治 23 年（1890）第 1 回総選挙に三重県第 5 区から立候補して当選した。これ以降、昭和 27 年（1952）の総選挙まで 25 回連続当選して 63 年間の議員生活を送った。

改進黨幹部として議会で藩閥政府の政策を痛烈に批判し、明治 31 年（1898）6 月第 1 次大隈内閣（隈板内閣）の文相として入閣。明治 36 年（1903）東京市会から東京市長に推され、明治 45 年（1912）6 月まで在任した。

大正元年（1912）藩閥中心の官僚政治に反発し政党政治の確立を目指した憲政擁護運動がおこると、立憲国民党の犬養毅とともに先頭に立って桂首相を糾弾し、翌 2 年内閣総辞職に追い込み、世に「憲政の神様」とたたえられた。大正 3 年（1914）4 月第二次大隈内閣の司法相として入閣。

対外政策面では、軍備縮小論を唱えて軍国主義化を批判し、日独伊三国同盟に反対した。

戦後は、戦争否定、世界連邦建設を提唱、91 歳のとき衆議院壇上で吉田内閣批判の質問を行なった。

昭和 28 年（1953）の総選挙で初めて落選。翌年、衆議院名誉議員となり、10 月 6 日死去、享年 95。

著書は約 80 冊に及び、大部分が『尾崎峯堂全集』全 12 巻に収められている。

昭和 35 年（1960）永年にわたる憲政に対する尾崎の功労をたたえて、尾崎記念会館が建設された。現在は、国会前庭(北庭)にある衆議院憲政記念館の尾崎メモリアルホールで、その足跡が展示されている。



『近代日本人の肖像』 国立国会図書館HPより



日本大学病院(建築中)

2 3 明治の文豪 吾輩ハ『坊っちゃん』テアル

なつめ そうせき
夏目 漱石

1867～1916

明治末から大正前期の小説家。

慶応 3 年（1867）江戸牛込馬場下横町(現在の新宿区喜久井町) で生まれた。父夏目直克の五男末子で金之助と命名された。生後すぐ里子に出され、翌年塩原家の養子となった。しかし、養父母の不和のため実家に引き取られ、小学校を 3 度転校した。漱石は、明治 11 年（1878）猿楽町（のち表猿楽町）にあった錦華小学校で第 1 期生として学んだ。同校は、大正 12 年（1923）関東大震災の後、帝都復興事業の区画整理で、本学に隣接する千代田区立お茶の水小学校の場所に移転した。

こうした幼年期の不幸せな体験が、漱石の人間形成に影響したといわれる。

明治 12 年（1879）東京府立第一中学に入学したが、同 14 年（1881）実母の死の衝撃で中退し、二松学舎に入り漢学を学んだ。

明治 17 年（1884）9 月大学予備門予科入学。明治 21 年（1888）塩原家から夏目家に復籍。

明治 22 年（1889）のちに近代の俳句や短歌の基礎を確立する正岡子規と親しくなる。

明治 23 年（1890）9 月帝国大学文科大学英文科に入学。

明治 26 年（1893）7 月英文科第 2 回生として卒業、大学院に進学。10 月東京高等師範学校の教師となるが、翌年、神経衰弱にかかり参禅。

明治 28 年（1895）4 月愛媛県立松山中学に赴任し、同じ下宿の子規の影響で句作に熱中する。

明治 29 年（1896）4 月熊本第五高等学校に転任。6 月貴族院書記官長中根重一の長女鏡子と結婚。

明治 33 年（1900）5 月文部省からイギリス留学を命ぜられ、ロンドンで英語研究に励む。この留学経験は、漱石に大きな文化的衝撃を与えた。

明治 36 年（1903）1 月帰国し、第一高等学校と東京帝国大学の講師となる。

明治 38 年（1905）1 月子規の門人高浜虚子の勧めで、『吾輩ハ猫テアル』を俳誌『ホトトギス』に掲載した。



英語教師の苦沙弥先生の家に迷い込んだ野良猫を主人公とし、猫が人間を批評する奇抜な着想、鋭い風刺と諧謔精神が読者に受けて、漱石の文名を一躍高めた。

明治 39 年（1906）4 月『坊っちゃん』『草枕』も好評を得た。

明治 40 年（1907）4 月教職をやめて、朝日新聞社に専属の作家として入社。『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』などを執筆した。

明治 43 年（1910）胃潰瘍で入院し、修善寺へ転地療養したが、8 月 24 日一時危篤となる。

明治 44 年（1911）文部省から通知された文学博士の学位授与を辞退する。

以後、『彼岸過迄』『行人』や、今年出版から 100 年目となる『心』で人間の孤独を追求し、その後も『道草』『明暗』など人間の実像に迫る作品を執筆した。

大正 5 年（1916）12 月 9 日胃潰瘍で死去、享年 50。

生前多くの弟子を育成し、大正 6 年（1917）12 月から初版『漱石全集』全 13 巻が刊行された（8 年 6 月完結）。森鷗外とともに近代文学の巨匠とたたえられている。

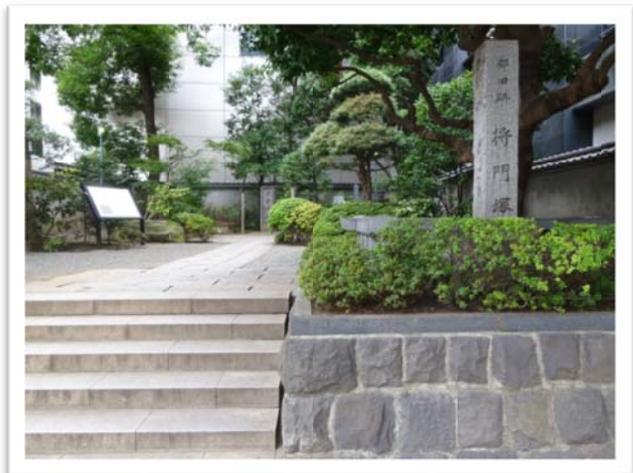
なお、お茶の水小学校の敷地に「吾輩は猫である 名前はまだ無い」と刻まれた石碑が建てられている。



『近代日本人の肖像』 国立国会図書館HPより



千代田区立お茶の水小学校



首塚(都旧跡 将門塚)



24 「バロン サツマ」と呼ばれた富豪

さつま じろはち
薩摩 治郎八

1901～1976



昭和の実業家、随筆家。明治34年（1901）駿河台で生まれた。祖父の薩摩治兵衛は、和洋綿織物の薩摩商店として一代で巨万の富を築き、「日本橋の木綿王」と呼ばれた近江商人だった。

治郎八は、大正9年（1920）渡英。目的は、オックスフォード大学留学だった。

大正12年（1923）にはすでに渡仏し、パリに在住。実家からの豊富な送金で、パリ社交界で華やかな社交を繰りひろげ、「バロン サツマ」（薩摩男爵）と呼ばれた。大正13年（1924）一時帰国。

翌大正14年（1925）駿河台に薩摩邸が建設された。これは、パリ風の2階建てで、1階には天井や壁に19世紀後半のフランス絵画を代表する画家フラゴナールを思わせる絵画が描かれ、大シャンデリアの下った大広間（舞踏室か）、20畳ほどのテラス付き洋室など5室が設けられていたという。

昭和元年（1926）結婚。千代子夫人は、会津松平家の血筋を引き、伯爵山田英夫の長女。パリで暮らした夫人の粋なファッションは、パリジェンヌからも注目されたという。昭和4年（1929）私財を投じて、日本人留学生のためにパリ日本館をパリ大学国際都市に建設して、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を受けた。開館にあたり、現在の邦貨で1億円を投じた大晩餐会を主催して、パリっ子の度肝を抜いたという。

またのちにオペラ歌手として活躍した藤原義江、ピアニスト原智恵子らのデビューを支援したり、パリ在住の藤田嗣治、岡鹿之助などの日本人画家ほか多くの芸術家の卵のパトロンとなり、惜しみなく私財を投じた。

1930年前後に起こった世界恐慌のあおりを受けて、昭和10年（1935）薩摩商店は廃業するに至った。

昭和14年（1939）再び渡仏し、第2次世界大戦中もパリに滞在した。のちに作家となり、ド・ゴール政権で長く文化相を務めたアンドレ・マルローなど旧知の文化人をナチスの手から守ったという。

昭和26年（1951）に帰国した頃は、全財産を蕩尽していた。伝記研究者の推計によれば、30年間で600億円を使い尽くしたとされ、若きアーティストたちには、空前絶後のパトロン中のパトロンだったと思われる。

その後は、浅草に住み、破天荒な前半生と本場で培った芸術の見聞を活かして、随筆家として生計を立てた。

浅草座の踊り子利子と結婚し、昭和34年（1959）利子の故郷徳島を旅行中、脳卒中で病床につき、療養中は口述筆記で執筆した。17年間徳島で療養、昭和51年（1976）2月死去、享年74。

著書に自伝『せ・し・ぼ・ん』、『巴里・女・戦争』などがある。



『「バロン・サツマ」と呼ばれた男』（藤原書店）より



東京医科歯科大学 難治疾患研究所
（かえで通り。御茶ノ水駅前交番を西入る）

謝 辞

展示にご協力くださった方の芳名を記して深く謝意を表します。

栗野芳夫氏

栗野涼子氏

参考文献

おもな参考文献を記して、学恩に深く謝意を表します。なお、下記のほか本文ページに注記した文献・資料等を参照しました。

(1)駿河台の景観—江戸から明治へ—

幕府普請奉行編・朝倉治彦監修『御府内沿革図書 江戸城下変遷絵図集』全 20 巻（原書房）

齋藤直成編『江戸切絵図集成』全 6 巻（中央公論社）

『嘉永・慶応 江戸切絵図（尾張屋清七板）』（人文社）

風俗画報臨時増刊『新撰東京名所図会 第 20 編 神田区之部』（東陽堂）

宮尾しげを監修『東京名所図会 神田区之部』（睦書房）

山本松谷『明治東京名所図会』上下巻（東京堂出版）

山本松谷画・山本駿次朗編『百年前の東京絵図』（小学館文庫）

正井泰夫監修『江戸東京大地図 地図でみる江戸東京の今昔』（平凡社）

吉原健一郎・俵元昭・中川恵司編『復元江戸情報地図』（朝日新聞社）

KANDA ルネッサンス出版部『神田まちなみ沿革図集』（株式会社久保工務店）

市古夏生・鈴木健一校訂『新訂 江戸名所図会』全 6 巻（ちくま学芸文庫）

川田壽『江戸名所図会を読む』正統（東京堂出版）

中村薫『神田文化史』秀峰閣

坂内熊治『駿河台史』（非売品）

『千代田区史』上下巻（千代田区役所）

『新編千代田区史 通史編』（東京都千代田区）

齋藤幸雄ほか『江戸名所図会』（中央和装本）

江戸切絵図『駿河台小川町絵図』（中央貴重書庫）

『北斎と広重 ふたりの富嶽三十六景』（山梨県立博物館）

社団法人霞会館資料展示委員会編『鹿鳴館秘蔵写真帖』（平凡社）

栗野涼子編『「文化と歴史の街・お茶の水」由縁の人物たち』（お茶の水茗溪通り会）

『国史大辞典』（吉川弘文館）所収 本パンフレット掲載人物該当項目

(2)江戸草創期の人びと

神田明神史考刊行会編纂・発行『神田明神史考』

大久保彦左衛門『三河物語』（中央貴重書庫）

『仙台市史 資料編 10 伊達政宗文書』1, 別冊（仙台市）

(3)活躍した武将・文化教養人

諏訪春雄・内藤昌編著『江戸凶屏風』(毎日新聞社)

堀口捨己『茶室おこし絵図集』第七集(墨水書房)

松尾芭蕉『奥の細道』(中央第3書庫)

『湯島聖堂と江戸時代』(財団法人斯文会)

室鳩巢『赤穂義人録』(中央和装本)

新日本古典文学大系 84『寝惚先生文集』(岩波書店)

日本随筆大成 別巻3『一話一言』(吉川弘文館)

濱田義一郎編集代表『大田南畝全集』(岩波書店)

明治大学記念館前遺跡発掘調査団『江戸駿河台の旗本屋敷』(明治大学考古学博物館)

(4)幕末維新から昭和時代までの人びと

『明治二十一年撮影 全東京展望写真帖』(大塚巧藝社)

NDL デジタルアーカイブ「近代日本の肖像」 デジタルアーカイブ

村上泰賢編『小栗忠順のすべて』(新人物往来社)

金井圓編訳『描かれた幕末明治 イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(雄松堂書店)

河鍋暁斎『暁斎画談』(中央和装本)

中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』1(教文館)

福永久壽衛『澤邊琢磨の生涯』(澤邊琢磨伝刊行会)

平尾道雄監修『坂本龍馬全集』(光風社書店)

宮地佐一郎『龍馬の手紙』(講談社学術文庫)

『重野博士史学論文集』(雄山閣)

玉乃世履『五龍文詩抄』(中央和装本)

日本立法資料全集別巻 788『仏民法契約篇講義』(信山社出版)

宮内庁『明治天皇紀』第1(吉川弘文館)

明治神宮監修『明治天皇とその時代—「明治天皇紀附図」を読む』(吉川弘文館)

三省堂百年記念事業委員会『三省堂の百年』

『神保町が好きだ!』第7号(本の街・神保町を元気にする会)

立命館大学編『西園寺公望伝』(岩波書店)

『岩崎弥之助伝』(岩崎弥太郎岩崎弥之助伝記編纂会)

『尾崎罌堂全集』(公論社)

『刑事博物図録』(明治大学刑事博物館)

夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』(中央第3書庫)

保昌正夫監修『近代作家自筆原稿集』(東京堂出版)

村上紀史郎『「バロン・サツマ」と呼ばれた男』(藤原書店)

鹿島茂『蕩尽王, パリをゆく 薩摩治郎八伝』(新潮社)

第 55 回 明治大学中央図書館企画展示
江戸の駿河台界限—御茶ノ水ゆかりの人々—

企画編集 : 中央図書館ギャラリーワーキンググループ

伊能秀明 鈴木秀子 宮澤順子

平田さくら 梅田順一 仲山加奈子

桑原理恵 曾野正士 廣田理恵

発行 : 2014年9月30日

明治大学中央図書館